

2023 年度 医学部 IR 報告書

— 2022 年度卒業生を対象とした卒業コンピテンス・
コンピテンシー到達度調査（学生自己評価） —



藤田医科大学 | R推進センター
医学部 | R分室

2023 年 4 月 1 日

藤田医科大学 I R 推進センター

医学部 I R 分室

2023 年度 医学部 IR 報告書

— 2022 年度卒業生を対象とした卒業コンピテンス・
コンピテンシー到達度調査（学生自己評価） —

1. 2022 年度卒業生を対象とした卒業コンピテンス・コンピテンシー到達度調査（学生自己評価）の概要
2. コンピテンス・コンピテンシー自己評価の集計・分析結果

2023 年度 医学部 IR 報告書

— 2022 年度卒業生を対象とした卒業コンピテンス・ コンピテンシー到達度調査（学生自己評価） — について

本学の教育目標を達成するため、教育及び学生支援に関する諸データの統合分析と情報提供等を行い、本学の教育活動の充実発展に寄与することを目的とし、藤田医科大学 I R（Institutional Research）推進センターが設置されています。今回、下部組織の医学部 IR 分室では、2022 年度医学部卒業生を対象として卒業時卒業コンピテンス・コンピテンシーの到達度調査（学生自己評価）を実施・分析しましたので、結果についてご報告いたします。

2023 年 4 月 1 日

2022 年度 藤田医科大学 I R 推進センター 医学部 I R 分室

古澤彰浩、観音隆幸、中村早紀、藤江里衣子、飯塚成志、一瀬千穂、

若月徹、川戸美由紀、山本正樹、横田正明、島向健太、吉本潤一郎

謝辞

本調査のデータ収集・分析にあたっては、医学部学務課・櫻井麗子氏に多大なご協力をいただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

1. 背景と目的

本学医学部は従来プロセス基盤型教育を行ってきたが、2015 年度第 1～3 学年よりアウトカム（学習成果）基盤型教育を採り入れた新カリキュラムに移行している。これに伴い、医学部では卒業時にすべての卒業生が身につける能力として「卒業コンピテンス（I～VII の 7 領域）」「卒業コンピテンシー（計 37 項目、現在 35 項目）」を定めた。低学年から各科目で段階的に実践力（応用力）を積み上げていき、卒業時に身につける能力をパフォーマンス・レベルとして評価するものである。

このような手法は全国の多くの医学部・医科大学で採用されているが、現時点では卒業コンピテンス・コンピテンシーに対する有効な評価方法は確立していない。知識や診察・診療技術は従来型の様々な試験で評価可能としても、プロフェッショナリズム・コミュニケーション能力・専門職連携の実践・独創的探究心等が卒業時に実践できることをどのような手法で評価するのかは難しい問題である。そもそもどの程度、どう実践できればよいかの基準が明確となっていない。従来こうした項目は信頼性・妥当性を有する方法では評価されずに、あるいは評価のないままに卒業させていたということもできる。

しかしながらこうした項目について、各学年においてどの程度修得しているかを調査し、カリキュラムに反映させていくことの重要性は論を待たない。そこで 2017 年度以降、本学では卒業時において卒業コンピテンス・コンピテンシー到達度の自己評価アンケートを実施している。結果は医学部のカリキュラム全体を俯瞰した改善に資するために利用するものとする。

2. 方法

1) 調査実施日・会場

2022 年 2 月 6 日(月)(医師国家試験実施翌日)、大学で開催された医学部 6 年生学生集会において実施した。一部の学生は同集会に Teams を通じて参加した。

2) 対象者・回答者、回答方法

対象者は 2022 年度医学部卒業生 113 名で、全員が回答した(回答率:100%)。医学部 IR 分室長が本調査の目的・方法を口頭で説明して調査参加を依頼した。調査フォーム(巻末に掲載)を Moodle で作成し、対象者がこれにアクセスして回答した。対象者全員に回答してもらうため、医学部 IR 分室長が回答者を Moodle で把握し、未回答者には回答を促した。

3) 調査項目

卒業コンピテンシー35 項目のそれぞれに対し、調査時点(卒業時)においてどの程度到達しているかについて、6 段階リッカート尺度により自己評価した。回答選択肢(得点)は以下の通りであった:「完全に修得できた(6 点)」「概ね修得できた(5 点)」「最低水準は修得できた(4 点)」「ある程度修得したが、最低水準には届かない(3 点)」「十分に修得できていない(2 点)」「全く修得できていない(1 点)」

今回使用したコンピテンシー項目は 2020 年度入学生から改訂されたもので、今回の対象者の入学時には導入されていない項目を含む。しかしながら新項目は旧項目の文言や内容を明確にしたり、時代に合わせたりするために修正・導入されたものである。2019 年度以降は修正前の内容と整合性を取りつつ、新規コンピテンシーが全学年カリキュラムに導入されている。今後同様の調査を経年的に行って学修成果の比較を可能にするため、本調査では新コンピテンシー項目を使用した。

3) 分析方法

卒業コンピテンシー35 項目の回答結果を基に、各項目、全項目、および卒業コンピテンス(I~VII の各領域)の平均点と標準偏差を算出した。

また、2020・2021 年度卒業生と卒業コンピテンス(I~VII の各領域)の平均値を比較し、各領域のトレンドについても検討した。なお、2020 年度では回答方法・調査項目・回答率で 2021 年度と 2022 年度と以下の点で異なる。

- 2020 年度:インターネット調査として実施(Google フォームを使用)。未回答者の把握は行わず(実質的に匿名調査)。回答率:64.4%。

分析においては、氏名・学籍番号などの個人を特定できる情報を除いた連結不可能匿名化データを作成し使用した。分析にはマイクロソフト社製 Excel を使用した。

3. 結果・考察

1) 2022 年度卒業生の自己評価 (図 1)

6 段階評価の平均は、コンピテンシー35 項目は全て 4.46~5.18 の範囲にあり、全平均は 4.91 であった。また、コンピテンス 7 項目はそれぞれ 4.73~5.05 の範囲であった。標準偏差は一部を除いて 0.7~0.9 の範囲であり、4 点・5 点・6 点をそれぞれ「最低水準は修得できた」、「概ね修得できた」、「完全に習得できた」と定義していることから、卒業時の段階で多くの項目について修得できたと自己評価している卒業生が多数である。

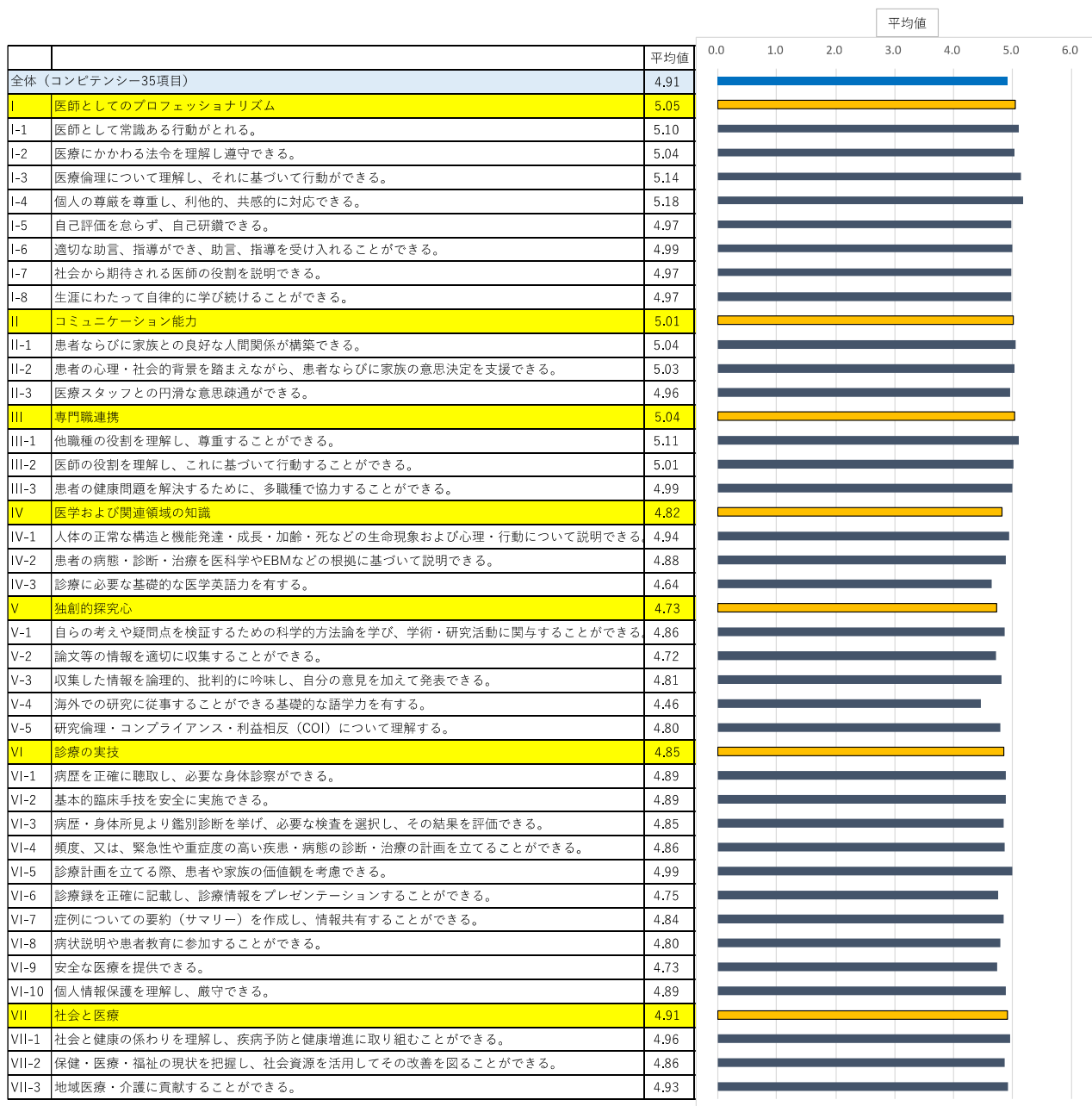
コンピテンス 7 項目では、「I 医師としてのプロフェッショナリズム」、「II コミュニケーション能力」、「III 専門職連携」の 3 つの項目で平均が 5 点を超えている。これらの評価の具体的項目であるコンピテンシーは全て 4.9 を超えており、中でも「I-3 医療倫理について理解し、それに基づいて行動ができる」(5.14)・「I-4 故人の尊厳を尊重し、利他的、共感的に対応できる」(5.18)・「III-1 他職種の役割を理解し、尊重することができる」(5.11)は 5.1 を超えて特に高くなっている。本学の理念「我ら、弱き人々への無限の同情心もて、片時も自己に驕ることなく医を行わん」に基づいて行われるプロフェッショナリズム教育や本学の特色であるアセンブリ教育(学部・学科の垣根を超えて全学で行う、他者を尊重する姿勢に基づくコミュニケーションと専門職連携教育)を強く反映する項目で特に高いことから、本学教育の効果と考えることができる。

「IV 医学および関連領域の知識」、「VI 診療の実技」、「VII 社会と医療」の 3 つのコンピテンスの平均値も 4.8 点台と高かった。卒業生が医学・医療の知識・技術に自信を持って卒業していることが伺われる。

一方で、コンピテンス「V 独創的探究心」は平均 4.73 と他に比べると若干の低評価となっている。これはコンピテンシー項目「V-4. 海外での研究に従事することができる基礎的な語学力を有する」(平均: 4.46)、「V-2 論文等の情報を適切に収集することができる」(平均: 4.72)が低いことによるものである。前者についてはコンピテンシー「IV-3 診療に必要な基礎的な医学英語力を有する」の低評価(平均: 4.64)と合わせて、従来より指摘されているように英語教育が重要な教育課題であることを示唆している。後者については、単なる検索のスキルや語学力の不足だけでなく、自発的に問題の本質を捉え、それに対して的確な情報を認識し、収集する能力の不足とも考えられる。

以上の結果から、語学教育と藤田ビジョンで目標に掲げられている「課題を設定し解決できる」能力の涵養が依然として重要な教育上の課題であると考えられる。1~3 年生に対しては TOEFL-ITP テストの導入や理系教養・基礎科目の中での英語教育などにより、基礎的な語学力の向上が図られている。今後はこれに加えて、臨床の場を含めた専門教育における実践的な英語教育も検討されるべきであろう。また、研究実践能力の涵養についても、3 年生に導入された研究室で医学研究の実際を学ぶ医学研究演習の効果を注視しつつ、臨床実習など医療の現場で扱う症例等に即した学術論文を読み、批判的吟味を行い、内容を発表するなど、研究マインドの涵養を目指す教育の実践も検討すべきであろう。このような教育を経て、全ての卒業生が本学の建学理念「独創一理」を実現することを期待したい。そして卒業生がそれぞれの場においてそれを発揮することが藤田医科大学のプレゼンスを高めることにつながるであろう。

図1. 2022年度医学部卒業生の卒業コンピテンス・コンピテンシー自己評価



2) 2020～2022 年度卒業生の比較 (図 2)

2020 年以降、新型コロナウイルス感染症により病院実習を含む教育体制に大きな変化が起こった。それにもかかわらず、2022 年度卒業生は自己の学習成果を高く評価している。2019 年度の平均値 4.60～4.76 から昨年度までに 5 点前後まで増加した「I 医師としてのプロフェッショナリズム」、「II コミュニケーション能力」、「III 専門職連携」は 2022 年度も同様の高水準を維持している。また、比較的 low 評価であった他の項目についても平均は増加傾向にあり、特に「V 独創的探究心」はその傾向が顕著である。項目間の系統的な差は縮まりつつあり、新型コロナウイルス感染症流行下においても学修を低下させない十分な教育体制が確保できたと同時に、データに基づいた教育改善の効果が現れていると考えられる。

図2. 2020～2022年度医学部卒業生の卒業コンピテンス自己評価平均値の比較

	2020年度	2021年度	2022年度
全体	4.82	4.87	4.91
I 医師としてのプロフェッショナリズム	4.96	5.00	5.05
II コミュニケーション能力	4.99	5.03	5.01
III 専門職連携	5.04	5.11	5.04
IV 医学および関連領域の知識	4.67	4.81	4.82
V 独創的探究心	4.41	4.56	4.73
VI 診療の実技	4.81	4.82	4.85
VII 社会と医療	4.83	4.87	4.91

